



巻頭言

幼児が表現することとは

名須川知子

現在は幼児たちの発達保障のために、従来とは異なった意味で幼児教育の重要性が増しています。まさに、就学前機関としての保育の場が必要とされています。それは、今この時代の幼児の育ちがますます難しい環境におかれているからです。幼児の育ちは、自然環境、すなわち心地よい光、空気、大地が必要とされます。そして、温かいまなざしが必要です。それが、人間による社会現象によって失われていき、失われたものに対する気づきと焦りがみられるのが現代の特徴でしょう。

しかし、現代を生きている私たち大人は、この自覚のもと、意識して目の前の幼児たちに対応していかなくてはなりません。

では、どのように環境を整えていかなくてはならないのでしょうか？ その具体的



な手立てを考えられるのが「保育内容」領域だと思えますが、なぜその方法をとるのか、その内容を選択するのか、ということを常に考えていく必要があります。さまざまな具体的な方法が浮かびますが、最近特に思うことは、幼児の生活と保育内容のつながりの重要性です。

たとえば、十二月になると多くの幼稚園で「クリスマス会」が行われます。これは、厳密に考えると一つの宗教的な行事ですが、わが国では信仰とは無関係に実施されることがあります。従って、サンタクロースが登場したりするのは、この現象は「日本版クリスマス」として生活に関連しているからいいのではないか、という考えもあるでしょうが、保育内容の意味から考えた場合、やや問題ではないかと思えます。どのような行事であれ、活動であれ、幼児の真の成長に役立つものを選択、吟味して行い、その成果を評価すべきものであると考えます。

このような行事への見直しは多くの問題を含んでいます。たとえば「例年やっているから」とか、「わが国における年中行事の一つだから」という理由だけでは心許ないのです。今、目の前にいる幼児にもっとふさわしい、栄養の糧となるような内容の教材を研究していくことが求められます。行事の見直しそのものは、年度末にじっくり行つてほしいものです。その際、幼児たちのこれまでの一年の育ちを振り返り、またこれからの育ちを心に描いて何が適切なのか、ということがまず考えられるべきで



しょう。

しかし、行事だけではなく、日々の保育についても生活と保育内容のつながりが問われます。たとえば、「遊びと表現」のつながりです。これは、長年意識してきた研究テーマですが、昨年度まで四年間幼稚園園長を務めた経験も含め、実践的なテーマとして、今年五月の保育学会で発表しました。

もともと保育内容の「表現」とは、音楽的なこと・美術的なこと・身体表現的なこと・劇表現的なことが混ざり合ったものではなく、もっと根本的な、幼児自身があらわしたいと思っていること、活動している間に思いついて考えたこと、あるいは「あらわそう」という意志以前に幼児の姿・行動に思わず出てしまったこと、が根底にあるのではないのでしょうか。そして、その思いをあらわす媒体として、自分の身体・声・音・ものなどがつかわれている……。そうしたことが領域「表現」の考え方の基本にあるべきだと思います。そう考えると幼児の生活・遊びから表現をとらえる方向性が生み出されるのでしょうか。しかし、この考え方は、実際の保育者にとって難しい点もあったようです。何がひっかかるかという点、それは「表現」という言葉であり、その言葉が「形としてあらわれる」という枠組みを与えてしまうのです。

週案の中で、各担任が「研究テーマ(遊びと表現)に対する評価」を記述しています。一学期には「活動ばかりに目がいってしまふ」「遊びと生活のつながりがもてな



い「遊びが単発で充実感がもてない」など、思いきり遊ぶ姿と表現のかかわりが見えない、という課題ばかりが浮上していました。そこには、もつと長い目で幼児の遊びを見るべきだ、反対に瞬間にも遊びと表現はつながっている、いや本当は幼児の遊ぶ姿こそが表現ではないのか、といったさまざまな思いがめぐっていました。しかし二学期以降の記述の中で「きれいな空、と保育者が空を見上げて感動していると、そばにいた幼児が上を見上げると同時にジャンプして空に手を届かせようとしている」という文章がありました。その時「ああ、これが表現なんだ」ということに気づいたといえます。遊びや生活の中で身近な自然に気づき、その思いを共有できた時に表現する姿を見つけることができます。思いきり遊べることで、そこに表現している姿がみられるのです。その感動した気持ちあらわす方法としてさまざまな媒体を環境として準備すること、それも一つの重要な環境構成ではないか、と考えます。

幼児期のこのような基本的な経験を通して、大人になって芸術作品にも出あうことができるのでしょうか。幼児期から「創造的表現活動」や「創造的芸術活動」という用語を適用することが可能だと思います。そうすることで、人間の育ちの可能性をさらに未来に向かって広げてくれる「希望」という文字が浮かび上がってきます。それが幼児の発達を保障する一つの手立てではないか、と考えています。

(兵庫教育大学教授)